

Janusz Tazbir,

*Szlachta i teologowie: Studia z dziejów
polskiej kontrreformacji*

小山 哲

ポーランド民族とカトリシズムとの密接な結びつきが、今日に至るまでヨーロッパ史の中でポーランド一国の粹を超えて様々な影響を及ぼしてきたことは比較的よく知られている。この関係の起源をたどっていくと、ひとつの重要な転換点として一六世紀末から一七世紀にかけての反宗教改革期に行きあたる。それ以前にプロテスタンティズムの急速な波及をみながらも、ポーランドはこの時期に決定的にカトリック圏内に定着するのである。それでは、反宗教改革がポーランドで勝利を収めたのはなぜか。

残念ながら今日のわが国でこの問いに答えようとすれば、幾つかの通史の中の概説的記述を参照するか、さもなければ近代世界システムの中でポーランドの占める位置との関連からこの問題を説明しようとするI・ウォーラーステインのマクロな視点からの試みに手をのばすしかない。①しかし、この問題を考える際に必要

とされるのは、さしあたりウォーラーステインとは対照的な視角であろう。後述するように、王権による上からの強制が行なわれなかったポーランドにおいては、反宗教改革の成功とは、カトリック教会が個々の地域の社会集団を日常的なレベルでの接触を通じて改革派の手から回復し、或は改革派に抗して確保するというミクロなプロセスの積み重ねの結果に他ならなかった。それでは、この微小な過程の集積は、どのような条件のもとで、いかなる手段によって達成されたのか。

ヤスシュ・タズビルは、現在この問題に答えるのに最もふさわしい研究者であろう。一九五三年に『一六世紀のポーランドにおける宗教改革と農民問題』②を問うて以来、この文化・社会史家は毎年数冊という驚異的なペースで成果を発表してきたが、その業績の大半は一六―一七世紀のポーランド社会における宗教的変動の諸問題に関わっている。今回とりあげる『シュラフタと神学者たち―ポーランド反宗教改革史からの一研究』は、これらの研究から得られた豊富な知見に基づいて上記の問題に関して包括的な説明を試みている点で、注目に値する。

もっとも、この点で本書のタイトルは一見、読者をとまどわせるかもしれない。シュラフタと神学者、妙な取り合わせであり、一体何がテーマなのかこれだけでは判然としない。しかし、読み進むうちに次第に明らかとなってくるのは、この本の主人公は「シュラフタ」でも「神学者」でもなく、「と―と―」両者を結ぶ接続詞に他ならないということなのだ。書評者が詭弁を弄しているという誤解を招かないためにも、急いで内容の紹介に移ろう。

まず「序」において、「反宗教改革」の用語上の一般的な規定と時期設定（ポーランドでは一五六〇年代末から一六五八—一六八年のワルシャワ連盟協約の実質上の停止まで）に続いて、ヨーロッパにおける反宗教改革の三つの道が示される。第一は国家が積極的にカトリック教会と協力する道（典型例はスペイン）、第二は戦争を通じてのカトリック教会の勢力回復（三〇年戦争時のドイツ）、第三は他宗派の存在を一時的に容認したうえで様々な説得の手段を用いて勢力の回復を図る道である（例えばナントの勅令期のフランス）。タズビルは、ポーランドのケースはこのうちの第三の道に該当すると述べたうえで、本書の主要な問題関心として、第一にポーランド文化史の中でトレント公会議以後のカトリシズムがいかなる位置を占めていたか、第二に反宗教改革のプロバガンダはいかなる内容のものであったか、の二点をあげている。

本論に入って最初の二章は、反宗教改革の前提としての宗教改革を扱う。第一章「ポーランドの宗教改革の盛衰」では、この運動の社会的基盤が概観される。ポーランドの宗教改革は一六世紀半ばから国政上のヘゲモニーをめぐるシュラフタの運動と結びついて急速な展開をとげることから、西欧には見られない特色を帯びることになった（例えば、この国のカルヴィニズムには禁欲的な経営の賛美は認められない）。農民層の中にほとんど浸透せず、個々の有力なバトロンの好意に依存したポーランドのプロテスタントティズムは、一七世紀の国家の地方分権化に伴って分裂を深め、バトロンの死去や改宗と共に消滅する運命をたどった。タズビル

は、この国の宗教改革がまずなによりも知的運動、次いで社会的・政治的運動であって、新しいタイプの信仰を生み出す闘いは後景に退いていたことを指摘し、この点にその急速な波及と衰退の原因を見い出している。第二章「知的運動としての宗教改革」は、この宗教改革の「知的大冒険」としての側面に光をあてる。ルネサンス期のポーランドの知識人の多くは、超宗派的な文化的覚醒の波の中で、プロテスタントティズムの中に新しい知の形を見い出した。しかし他方で、このような先知主義的傾向は、社会の下層部にとってはむしろ宗教改革の受容を妨げる要因となった。イメージよりも文字に、感情よりも理性に訴えるプロテスタントティズムは、後述するように土着の民俗に柔軟に適応した反宗教改革に敗れ去ったのである。

続く二章は、以上のような宗教改革に対して反宗教改革がどのような文化的・社会的・政治的特色を持っていたかを概観する。第三章「ポーランド・バロック文化に対する反宗教改革」においてタズビルは、反宗教改革期のカトリシズムが、「目から魂へ」というイェズスの標語に見られるように、豊かなイメージを通じて人間の感性に訴えようとする点でバロック文化と共通性を持っていたと指摘し、バロック文化衰退の責任をイェズス会の画一的教育の波及に帰する見解を批判している。少なくとも一七世紀半ばまではバロック文化は順調に発展していたのであり、それはまた、カトリック陣営が強制手段に訴えずに改革派と論争を行ない、高い知的水準を維持していた時期でもあった。この点で転期をなすのがコサツクの反乱とスウェーデンの侵入による所謂「大洪水」の時代であり、それ以降、バロック文化が国際性を失うと

同時に、カトリック教会の知的水準も目に見えて低下する。第四章「反宗教改革の社会的・政治的プロバガンダ」では、ポーランドの反宗教改革の主たる武器としてのプロバガンダの特質が考察される。カトリック教会は当時のポーランドの国制——貴族共和制——に即して国王よりもシュラフタを味方につけることの重要性を理解しており、プロバガンダの内容もその目的に従属させられた。シュラフタにとつての脅威は、ひとつは国王による王権強化であり、いまひとつは農民の反乱である。反宗教改革のプロバガンダは、一方でカトリック教会こそシュラフタの特権の守り手であり、宗教改革は国王の専制をもたらずと主張し、他方でしばしばドイツ農民戦争を例にとつてプロテスタントイイズムと農民反乱との結びつきを強調することにより、シュラフタ層の支持の確保を狙った。

以上の総論的叙述に続いて、以下個別的な問題を扱った章が続く。第五章「宗教的プロバガンダにおける生きたことばの役割」ではプロバガンダの伝達手段の問題が取りあげられている。宗教改革運動が活版印刷術の普及と密接に関連していることはよく知られているが、それに対してポーランドの反宗教改革は出版をむしろ必要悪とみなし、「生きたことば」(live show)を重視した。このカトリック教会による口頭プロバガンダの広範な導入は、議会制度の発達に伴うシュラフタの演説重視型の政治生活に対応している。とタズビルは指摘する。口頭プロバガンダは具体的には改革派との宗教討論会、教会での説教、宗教劇、告解制度等を通じて行なわれたが、その際、常に単なることば以上の要素が機能している。例えば、宗教討論会は反対者の理づめの説得よりもむしろ

る自陣営の鼓舞を目的とし、一種の演劇的性格を帯びていたし、毎日曜の説教でも身ぶりを混じえることにより語られることば以上の意味を伝達した。また、イエズス会による新しい挨拶の導入に見られるように、宗派的アイデンティティを示す一連のことば・身ぶりの体系が成立する。こうして反宗教改革は、語り、ジェスチャー、音楽、画像、さらにはにおいまでをも動員して、いわば「条件反射」を利用したプロバガンダを行なったのである。このような「生きたことば」は信徒の日常意識の形成に大きな影響を及ぼし、敵対宗派のステレオ・タイプ化したイメージを生み出した。続く第二章はこの問題を扱っている。

まず第六章「異端と悪魔の姿」では、反宗教改革のプロバガンダを通じて宗教上の相違が民族的・風俗的異質性と同一視されていく過程が分析されている。中世の悪魔はいつてみればコスモポリタンであったが、一六世紀に入るとその国を脅していると考えられる外国人の衣裳を身にまとい始める。ポーランドではまず「ポーランド的」カトリック、「ドイツ的」ルター派、「ロシア的」正教会の三宗派が存在するという見方が形成され、一七世紀に入るとこれがさらに身分差(カトリック⇨シュラフタ、正教⇨農民、ルター派⇨商人)と結合して、「ポーランド人⇨シュラフタ⇨カトリック」対「ドイツ人⇨平民⇨異端・悪魔」というステレオ・タイプが成立する。同時に悪魔の子としてのルター派のイメージも肥大化していき、ポーランド人から見たドイツ人の最もネガティブな面がこのルター像に付与されていく。

このような異端観のひとつの極限形態が魔女である(第七章「魔女裁判」)。ポーランドでは魔女狩りの最盛期は西欧に比べて

かなり遅れた（一七世紀後半）。タズベルは、魔女裁判と社会闘争との関連に着目しながらこの時間的なずれを説明しようとする。彼は、宗教改革に伴う中世的社会保障制度の消失と魔女裁判の増大とを結びつけるキース・トマスの説を紹介したうえで、一六世紀のポーランドに関してはこの説はあてはまらない、とする。ポーランドの宗教改革は貧民に対する喜捨を廃するに至らず、また反宗教改革はむしろ社会保障制度を充実させたからである。しかし一七世紀に入ると農村での領主―農民関係の緊張、戦乱に伴う貧民の増大のためにこれらの社会保障が機能低下をきたし、社会的フラストレーションが高まって魔女裁判の増加をもたらした。この国の魔女裁判の特色は、ひとつにはシュラフタ身分の者は人身保護律のためにほとんどその対象とならず、第二にそれとも関連するが、きわめて狭い地域内の日常生活と密着しており、政治的・広域的モチーフが皆無である点にある。その意味で魔女狩りの主導権は一般民衆の手にあったが、これに対する教会の立場は微妙であった。なるほど悪魔学はカトリック教会「公認」の学問であった。しかし反宗教改革は一面で民衆の集団的想像力に対する支配権の確立をめぐる闘いでもあったのであり、この点で教会当局は民衆主導型の魔女狩りには批判的ならざるをえなかった。このため、ポーランドでは一八世紀に至るまで魔女に対する教会裁判権確立の努力が続けられることになる。

続く三章は反宗教改革と宗教的寛容の関係をとりあげている。第八章「宗教的ボグロムとワルシャワ連盟をめぐる闘い」では、シュラフタに信仰の自由を保障したワルシャワ連盟協約（一五七三年）のもとで、上からの強制手段を欠いたまま運動を進めてい

かざるをえなかったカトリック教会の特殊な事情が浮き彫りにされる。連盟協約に対する反宗教改革の闘争は二つの次元にわたって展開した。まずカトリック教会は説教や学校教育を通じて民衆を反プロテスタント暴動に向けて煽動した。このため連盟協約成立直後から民衆の改革派教会襲撃が相次いだ。こうして下から宗教的寛容の基盤を掘り崩す一方、カトリック陣営は、議会において連盟協約に具体的な執行規程を付そうとするプロテスタント側の企図を阻止することに努め、これに成功する。しかし、このような状況を正当に評価するためには当時の他のヨーロッパ諸国との比較の視点が必要である。相次ぐ暴動にもかかわらず人命に関わるような事例は稀であり、ポーランドにおける宗派間の関係は西欧諸国に比べて比較的穏やかであった。その原因のひとつはカトリック側の寛容な態度であり、その根底にあったのは第九章「カトリック側の寛容の擁護者たち」が示すように、教義上の要請というよりは、ポーランド内外の情勢の冷静な把握に基づく「政治的リアリズム」であった。この時期のポーランドのカトリック教会の寛容な姿勢は異端審問制度に対する批判的な立場の中にもうかがわれる（第一〇章「ポーランド人の異端審問観」）。この国では異端審問制度は全く不人気であり、ワルシャワ連盟の批判者ですらその導入には反対するほどであった。シュラフタにとって異端審問は人身保護律に抵触するのみならず、ハプスブルク家の絶対王政のイメージと結びついて、貴族共和制下の「黄金の自由」とは相容れないものととらえられたのである。

このように外的状況に柔軟に対応したポーランドのカトリック教会は、他方で信仰の内実の変革にも取り組んだ。第一章「反

宗教改革期の宗教性」はこの問題の分析にあてられている。この点で重要な役割を果たしたのは一六世紀末から一七世紀初頭にかけて相次いで設立された兄弟団組織であった。兄弟団は反プロテスタント意識の高揚に努める一方、慈善活動に従事し、敬虔な信仰の普及に寄与した。またイエズス会の手によって瞑想、苦行、熱心な聖母崇拜等の新しい要素が導入され、さらに巡礼、聖人・聖遺物崇拜の広範な普及を通じて、新しいタイプの信仰が人々の日常生活の深部に根を下ろしていった。その際注目しているのは、カトリック教会が、とりわけ農民の間に強固に残存していたキリスト教導入以前の異教崇拜の名残りに対して、その一部を排しながらも、一部を典礼の中に導入することによって農村部への定着を図ったことである。このような地域的特質に対応した教会政策はカトリック教会の土着化をもたらした。タズビルはポーランドにおけるこのような傾向を「カトリシズムのサルマチア化」と呼んでいる(第一二章「トレント公会議後のカトリシズムのサルマチア化」)。

一七世紀のポーランドでは、祖国の防衛と普遍教会の利益との一致の思想が形成され始める。但しその際の重心は後者よりも前者に傾き、ポーランドのカトリック教会はローマ化よりもむしろ民族化の方向へと進んだ。反宗教改革の主な関心の対象はシュエタ層であり、教会のプロバガンダ装置は彼らの政治的イデオロギ―に奉仕する傾向を強めていく。この点でカトリック側が理想とした政治モデルの変遷は示唆的である。一六世紀後半から一七世紀初頭までは反宗教改革側の政治理論家たちはカトリック絶対王政をモデルとしていたが、ゼブジドフスキのロコシュ(ジグム

ント三世の王権強化に対するシュエタの反乱)を契機にこのモデルは放棄され、シュエタの「黄金の自由」の擁護に転ずるのである。また、民族化の進行に伴って教義の解釈においても普遍的・超越的モメントが弱まり、世俗的モチーフが入り込んでくる。聖書はポーランドの国制に模して解釈され(例えばモーセは軍司令官 *heman*、アロンは彼の文書起草官 *hanutz* である)、聖母はポーランドの自由の守り手となり、聖人崇拜においても同郷の聖人が人気を集め始める。儀礼面でも宗教討論、焚書、行列、巡礼等の演劇化に伴ってフォークロアや世俗のモードが取り入れられ、民族色を強めていった。このように「知的大冒険」としての宗教改革に対して、反宗教改革は地域の日常生活の中に入り込み、様々な手段を駆使して民衆の感性と想像力に訴えかけようとした点に特徴がある。しかしタズビルによればカトリシズムのサルマチア化が反宗教改革の勝利を決したわけではない。サルマチア化が進む以前に既に宗教改革の敗北は明らかであった。しかしサルマチア化によってカトリック教会の勝利は揺るぎないものとなり、分割後のポーランド民族にみられるポーランド性 *Polishosc* とカトリシズムとの結合の基盤が準備されたのである。

以上のように反宗教改革期のポーランドは宗教生活の深部に達する大きな変化を体験した。従来、西欧のヒストリオグラフィーにおけるこの時期のポーランドの宗教関係の評価は両極端に分れている。一方はこの国の「異端者の避難所」としての側面を強調し、他方は「異端者迫害の国」としてポーランドを描き出す。前者にとっての重大事件は一五七三年のワルシャワ連盟であり、後者にとっては一七二三年のトルンにおける反ルター派暴動である。

しかし問題はこの間の一五〇年間の推移にあるのであって、この時期を寛容か迫害か一方に図式化してとらえることはできない。

一六世紀と一七世紀では状況は質的に異なっており、とりわけ一六四八―一六〇年の「大洪水」は多くの点で決定的な転換点となった。最終章「反宗教改革の勝利のもとで」は、この質的転換の問題を扱っている。それはひと言でいえば、一六世紀のイデオロギ―的ブルジョアから一七世紀、とりわけ「大洪水」以後のカトリック独占体制への変化であるが、この転換を決定したのが王権ではなく、シュラフタ・マグナート層の態度であったところにポーランドの反宗教改革の個有の特質があった。一七世紀に法制上でも日常生活の場でも寛容が狂信に席を譲ったとすれば、それはシュラフタの心性に根本的な変化が起こったことを示している。とタズビルは主張する。その変化は、例えばプロテスタントを取り巻く政治状況の推移の中にもうかがうことができる。一六世紀にはプロテスタントのみが政治的党派を形成するというのではなく、「法の執行」運動にみられるようにカトリック陣営の中にも多くの同盟者を見出した。しかし一七世紀前半になると改革派勢力はワルシャワ連盟擁護の闘争の中で明確に党派的色彩を帯び、連盟支持派のカトリックは所謂「ポリティク」として自宗派内で分離する。さらに反宗教改革の圧力の増大は、プロテスタント側が次第に外国の援助を期待するようになり、これがさらにプロテスタントはシュラフタ共和制を揺るがす「第五列」であるとするかトリック側のプロバガンダを誘発するという一種の悪循環を生み出した。このようなプロバガンダが機能した背景にはカトリック以外の国に囲まれたポーランドの地政学的特殊事情があると

はいえ、問題はそのような現実そのものよりも、それがプロバガンダを通じてシュラフタの意識の中にどのような反映を見出したかにあるのである。シュラフタは「大洪水」期の一連の戦禍の原因を国制の欠陥ではなく国内の宗派対立に求め、プロテスタントの政治的裏切りの神話をつくりあげた。「大洪水」後、犠牲の羊としてアリウス派が追放され、ワルシャワ連盟の実質上の機能は停止したのはその必然的帰結であったといえる。シュラフタの身分的結合は次第にカトリック内の宗教的紐帯と一体化し、カトリシズムは一方で農民の反乱を防ぎ、他方で絶対王政化を阻むシュラフタの「黄金の自由」のイデオロギ―の支柱となると同時に、「シュラフタ⇨ポーランド人⇨カトリック」のステレオタイプに見られるように、民族的帰属の基準とみなされるに至るのである。

三

以上の概観からも明らかのように、タズビルは貴族共和制期のポーランドにおける宗教的変動に対して非常に多角的なアプローチを試みている。ある意味で本書は彼の多方面にわたる従来の研究成果のエッセンスを集めたものであり、個々の点をとってみれば既にタズビルの読者にはおなじみの主張が繰り返されているのであるが（既発表の論文と一字一句異ならない記述が数頁にわたって続く箇所が幾つかある）、しかしそれらの成果が一枚の見取図の中に手際よく収められて呈示されたことの意味は小さくない。ただ、このように多岐にわたる著書のひとつひとつの論点を十分に吟味することはスペースが許さないし、書評者の力量を超えて

もいる。ここでは前に触れたこの本のタイトルを手がかりにして、本書の意義の一端に触れてみることにしたい。

本書の特徴のひとつは、反宗教改革の進展をポーランド社会全体の長期的な変動と関連づけて説明しようとしている点にある。その際注目すべきことが二つある。ひとつは一九五〇年代のポーランドの研究に見られたような、宗教運動と社会経済史上の階級対立とを短絡的に結びつけ、反宗教改革を一義的に反動と規定するやり方(タズビルの初期の著作にはこのような傾向が見られる)は極力避けられ、反宗教改革が民族意識の形成や宗教生活の変革に果たした役割を客観的に評価しようとしている点である。いまひとつはその際宗教生活の根底を支える集合心性、及び外界からその心性に働きかけ、またその心性を利用して情報を伝達するコミュニケーションのあり方に焦点が定められている点である。その意味で、本書の主人公はシュラフタでも神学者でもなく、前者に代表される社会全体と後者に代表される教会組織とを結び関係のあり方それ自体であるといえるだろう。タズビルは反宗教改革のプロバガンダの分析を通じてこの両者の関係の性質を明らかにしてみせる。上からの物理的強制手段を欠いたポーランドのカトリック教会は、日常的な生活圏のレベルでプロバガンダを通じて地域社会に働きかけようとするが、それが成功するためにはプロバガンダの内容と手法がその社会の心性にある程度適合していなければならぬ。反宗教改革はポーランドに個々の条件に柔軟に対応して勝利を確保したのみならず、カトリシズムを不可欠の一部として組み込んだ新たな意識体系を作りあげた。しかし集合心性に適應していく過程で、教会そのものの土着化・民族化もまた

避けられぬものとなったのである。

この点に関連して、しかしながら本書が明確な解答を与えていない問題が残されている。タズビルは一方で反宗教改革の成功の鍵をシュラフタ層のカトリック化に求めながら、他方で社会の下層部との接触に成功しなかった宗教改革と社会全体に浸透した反宗教改革とを対比してみせる。しかし、一七世紀に様々なレベルで社会的対立が顕在化する中で、貴族共和制の支配イデオロギーと化したカトリシズムが同時に一般民衆の間にも強固に定着したのとはなぜか。また、本書で明らかにされたトレント以後のカトリシズムにみられる新しい信仰の型(「生きたことば」の役割、儀礼の演劇化、等)はどの程度までポーランド個々の特色であり、どの程度まで反宗教改革一般に共通するものであるのか。総じてタズビルの筆使いは慎重であり、一六世紀末のカトリック絶対王政型国家モデルや一七世紀のイエズス会による農民擁護的な社会プログラムの評価についても、問題点を指摘するにとどめ、自らの意見は保留している。しかし、著者の控え目な自己規定——「将来のジンテーゼのための仮縫い」——にもかわらず、本書は反宗教改革期の社会変動に新しい角度から光をあてる試みとして、ポーランド史研究者にとってはもちろん、近世ヨーロッパ社会の比較史研究のためにも豊富な材料を提供しているように思われる。

① I. ウォーラーステイン、川北稔訳『近代世界システム——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立——』I、岩波書店、一九八一年、二二二—二二五頁。

② *Reformacja a problem chrześcijaństwa w Polsce XVI wieku: Oddziaływanie wsi klasowej na wsi polskiej na kształtowanie się*

- ideologii religijnej szlachty w okresie reformacji*, Wrocław 1953.
- ③ 最近刊行されたタスビルの選歴記念論文集に一九八〇年までの彼の著作の一覽が収められてゐる。 *Kultura polska a kultura europejska: Prace ofiarowane Januszowi Tadeuszowi w sześćdziesiątą rocznicę urodzin*, Warszawa 1987, s. 5-52.
- ④ その具体的なあらわれが「キリシタン=キリスト教の防壁」論である。この問題についてタスビルは最近非常に興味深い本を出した。 *Polskie przedmurze chrześcijańskiej Europy: mity a rzeczywistość historyczna*, Warszawa 1987.
- ⑤ タスビルの研究成果のかんりの部分は西ヨーロッパの言語と読むことが出来る。以下、本書のテーマに特に関係の深いものをあげて置く。知的運動としての宗教改革については、 *La Riforma polacca come movimento intellettuale*, in: *Storia religiosa della Polonia*, ed. by L. Vaccaro, Milano 1985, pp. 97-108. 反宗教改革の政治的・社会的のロマンチックについては、 *La propaganda politique et sociale de la Contre-Réforme en Pologne*, *Il Pensiero Politico* 5-1

- (1972), pp. 44-61. フロマンチックな言語の役割については、 *Le rôle de la parole dans la propagande religieuse polonaise*, *Revue d'histoire moderne et contemporaine* 30-1 (1983), pp. 16-32. 異端と悪魔のイメージについては、 *L'image de l'hérétique et du diable en Pologne dans la propagande religieuse catholique aux XVIe-XVIIe siècle*, *Il Pensiero Politico* 15-2 (1982), pp. 323-337. 宗教的寛容については、 *A State without States: Polish Religious Toleration in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, Warszawa 1973. 異端審問については、 *Les inquisitions aux yeux de Polonais*, *Acta Poloniae Historica* 49 (1984), pp. 43-66. フォリンキタの民族化については、 *La polonisation du catholicisme*, in: *La République nobilitaire et la monde: Etudes sur l'histoire de la culture polonaise à l'époque du baroque*, Wrocław etc. 1986, pp. 124-156.
- (三三〇頁 一九八七年 PW „Wiedza Powszechna” Warszawa)
(京都大学大学院生)